

## 草庵茶室の成立と隠逸思想の関わり

呉 爽

### はじめに

茶道は、客をもてなすことによって「一座建立」を営む「遊び」であるけれども、決して世俗の饗応ではない。亭主はわび草庵の主であることを前提とし、すべて出世間の規則によってお客様をもてなすのである。茶道には、理念の上でも具体的表現の上でも、隠逸への志向が強い。茶席はいつの時代でも、俗世から離れ、浮世の塵の外であることが求められていた。世に利休の詠と伝える道歌に「露地はただ浮世の外の道なるに心の塵をなに散らすらむ」という。紹鴎も「数寄者といふは隠遁の心第一に侘て」<sup>1</sup>（『紹鴎門弟への法度』）といい、また「茶事もと、閑居して物外をたのしみ居る所」<sup>2</sup>（『紹鴎侘の文』）といていたと伝える。茶室をいうと、すぐ「藁葺き屋根」「皮付きの脆い柱」「葦や木賊の天井」「暗くて調子の悪い色の砂壁」など茶室のイメージが浮かび上がった。利休らによって完成した「侘び茶」を行う場所——「草庵茶室」は当時の田舎家を模したものであるとよく説明されてきたが、今までの農家などで使われている土壁が上流階級の住まいに影響を与えて数奇屋が出来たという考え方はおかしいと思われる。むしろこれは古代末期から中世にかけての隠者の草庵を受け継いでいるのではないかと考えられている。そして、遁世者たちが山里に隠棲した草庵を模倣した草庵茶室をかえて賑やかな市中に移転させるという発想は「大隠隠朝市」という隠逸思想とは何か関係があるのではないか。今回の報告では、まず草庵茶室の源流である草庵風建築の系譜を辿り、美的感覚として定着されてきた草庵のイメージと隠逸思想との関わりを指摘したい。つぎに、原文史料をもとに、茶道形成期に流行っていた「市中隠」の観念について考察を加えたい。

### 1. 草庵風建築の系譜

#### 隠逸風潮と草庵

日本には本来社会の陰影を求めて住もうとする思想はなかったようである。日本の隠逸思想は中国から輸入されたものであり、奈良時代に芽生え、平安時代に入って次第に根を張りつつあった。中国の官僚知識人たちは、塵俗を離れ、自由・放逸を求め、琴書を楽しんだり、詩句を吟じたりするような悠悠自適の生活を理想とした。中国文化の輸入によって、詩文や絵画で

表現された彼らの思想は、さらに日本の貴族にも大きな影響を与えた。

平城京造営の時、政府は上層貴族ならびに富者に対し、瓦葺・丹塗・白壁の住宅建築を造るよう奨励した。これは元明天皇、左大臣長屋王が熱心に中国文化を摂取したためとみられる。文雅を好んだ長屋王の自邸は中国風に造られ、しばしば漢詩文のサロンが催され、その会場は「作宝楼」と呼ばれる茅葺・黒木（皮付の丸太）の建物であった。それは中国文人隠者の「草廬」の模倣ではないかと思われる。

唐の詩人白楽天は香炉峰の下に「三間草堂」を営み、「五架三間新草堂、石階松柱竹編牆」を詠じた。楽天に傾倒する平安朝の文人貴族のなかには、彼を模倣し京の郊外に「三間茅屋」を建てて余生を送るものもあった。例えば、さきには『池亭記』<sup>3</sup>を書き、後に亀山に隠栖して『兔裘賦』を著した兼明親王はその一人であった。政治的に失脚した彼は、「小倉山の山亭に住み、柴扉の門・竹編の牆・松柱三間・茅茨」の閑居生活を送りながら、「兔裘賦」の冒頭で述べたように、みずから魯の隠公・伯夷・箕子・柳下恵および屈原らに比定して憂鬱を晴らし、心を慰めた。もう一人は、「一身漂泊して浮名を厭い、試みに避る喧々たる毀誉の声、秋水冷しく暮山清し、三間の茅屋残生を送る」<sup>4</sup>（『本朝文粹』『山家秋歌』）と詠じた紀長谷雄であった。彼は本当に三間の茅屋で隠逸生活を営んだかどうかわからないが、少なくともこの一句から彼が山居に隠棲することに憧れていたことが知られる。

平安初期に編纂された『凌雲集』<sup>5</sup>のなかに、小野永見の「田家」と題する詩があり、「結菴居三経 灌園養一生」と詠じている。庵を構えて小さな小経のある庭に住み、園に水を灌いで静かな生命を養うということ吟詠する。三経ということば遣いは、陶淵明の詩「三径就荒、松菊犹存」（「归去来兮辞」）にも出ている。前漢末、兗州の刺史蔣詡は、王莽が漢の帝位をうばって新王朝を建てると、病気を理由に故郷へ帰り、屋敷の竹林に三本の径を開いて旧友と共に散歩を楽しんだ。以後「三経」は隠者の居所を指すようになった。陶淵明や小野永見が詠じた「三経」もいうまでもなくこの意味である。

この時期の漢詩文は当然のことながら中国の影響を受けているものが多いが、隠逸生活を求めるという気

持ちは当時の人間にもあったと言っても過言ではない。特に貴族文人の間に、草庵を主な場としての隠逸生活は一つの美意識、あるいは生活的な思想として定着され始めたと思われる。

#### 池亭記

ところが不思議に思われるのは、漢詩文の衰える平安朝中期以後になると、急に隠逸的思想が強くなっているということである。藤原氏が自分の政権を固めるため、他の氏族を排斥することによって、門閥社会は固定してきた。権力社会の外にはみだした皇族や中・下層貴族らの間に、現存政治体制に不満を抱き、そこから遁れ、現存体制に依存しならぬ徹底な隠逸生活に入る者が現われてきた。一条——崇徳の約百年の間の詩を集めた『本朝無題詩』の中には、隠逸・閑居への憧れを表す詩はまことに多いことは、たぶん藤原氏の他氏排斥と関わっているのではないかと思われる。

この不徹底な隠逸心境は漢詩の領域にとどまらず、漢文随筆の分野にも広がっていった。

晋・王康琚の有名な聯句「小隠隱陵藪、大隠隱朝市」<sup>6</sup>に表現された理想を、「市中の隠」として具現したのが平安中期の文人慶滋保胤である。保胤は、天元五年(982)、楽天の『池上篇並序』や『草堂記』に倣って新築した自邸のことを『池亭記』に記している。『池亭記』は全体的にみれば浄土教の「厭離穢土、欣求浄土」に従うものである。前半は批判的な筆致で平安京の荒廃や貧富の差の増大を叙述し、後半は「家主職は柱下に在りと雖も、心は山中に住まふがごとし」<sup>7</sup>といいながら、この世の浄土である自邸とそこでの生活を記している。

「朝に在りては身暫く王事に随い、家に在りては心永く仏那に帰る」と、仕官と隠遁との両立を生活の方針としてまず唱える。そして彼は「詩句に長けて仏法に帰れ」た白楽天、または「身は朝に在りて志は隠に在」た竹林の七賢に倣い、帰宅後は白衣をつけ、口をすすぎ、西堂に赴いて念仏し、また法華経を誦読し、食後は東閣に入って読書するということを日課とし、時には「門を杜し戸を閉ぢ、独り吟じ独り詠」じ、余興があれば子供と池に船をこぎ、暇があれば下僕とともに園に入って作物を植える、という生活が記される。

これはあたかも「大隠隱朝市」のもっとも典型的な生活様式である。静謐の山中ではなく騒々しい市中の中で、みずから精神の浄土を開き、ここで精神の自由を心ゆくまで享受しようとしたのである。理論的に「大隠」或は「朝隠」の理由や意義を極めた中国の士大

夫と比べ、日本の文人隠者には常に「隠逸」生活自身に筆を運ぶ傾向があった。興味津々と池亭の生活を細やかに描いた保胤は、おそらく池亭の生活自身、とくに西堂と東閣という特定の空間での生活、を理想的な「大隠」の生活様式と同一視し始めただろう。

#### 方丈記

『池亭記』を原拠とする『方丈記』を著した鴨長明も特定の空間で自分の生活を営んだのである。これは、日野山隠棲の方丈である。「広さはわづかに方丈、高さは七尺が内なり。所を思ひ定めざるがゆゑに、地を占めて作らず。土居を組み、うちおほひを葺きて、継目ごとにかけがねを掛けたり」<sup>8</sup>とこの空間の大きさや建築材料を述べている。方丈というのは、一丈四方で、畳たみ四畳半のひろさの部屋である。このサイズはちょうど草庵茶室のもっともスタンダードな形である(もちろん、利休二畳敷のような茶室もあるが、標準としてはやはり四畳半の方を範とする)。こうしてみれば、草庵茶室は鴨長明の四畳半の草庵を、少なくとも思想的に受け継いでいるのではないかと思われる。

「今、日野山の奥に跡を隠して後、東に三尺余の庇をさして、柴折りくぶるよすがとす。南、竹の簀子)を敷き、その西に閑伽棚をつくり、北によせて障子をへだてて阿弥陀の絵像を安置し、そばに普賢をかき、前に法花経を置けり。東のきはに蕨のほどろを敷きて、夜の床とす。西南に竹の吊棚を構へて、黒き皮籠三合を置けり。すなはち和歌、管弦、往生要集ごときの抄物を入れたり。かたはらに琴、琵琶おのおのの一張を立つ。いはゆる折琴、継琵琶これなり。仮の庵のありやうかくのごとし」<sup>9</sup>。これは典型的草庵風の室内調度品である。もともと下鴨神社の神宮であった長明は社司になろうとしたが、失敗した結果、世を捨てたと決意した。しかし、上の記述からみれば彼が求めた道は仏の道というより、むしろ文芸の道そのものである。茶の湯の数寄趣味と相通ずるところも多いである。

以上述べたように、草庵といっても、兼明親王のものや長明のものではかなり違いがあったと思われるが、いずれも文芸趣味の所産である。そして、この文芸趣味は隠逸思想と深い関わりがあると思われる。文芸を媒介によって日本に伝わる中国の隠逸思想は、おなじく文芸を媒介によって日本の文人貴族の間に広がった。とくに隠逸・閑居の場である「草庵」のイメージはしだいに隠逸自身と対等され、定着的・共時的に表象されるようになった。草庵生活は生活意識に即すると、異質な想像力によって発展してきた。こうして、

隠逸の場である草庵風建築は一種の美的感覚として定着されるようになった。中世を通じ、草庵は文人・隠者によって山里に造られただけでなく、隠逸生活に憧れる文人貴族によって自邸の庭にも造営された。そして茶が庶民の間に普及するに伴い、寺社の前や街道のそばに茶の店が造られるようになった。その時町人たちは茶屋の範としたのは農家の土壁や瓦葺ではなく、むしろ何百年のうちに洗練されつつあった隠者の草庵であり、そして絶えず膨らんできたこの美的感覚であると思う。珠光流の草庵茶室は、少なくとも部分的にそれらの要素と美的感覚を受けついでものにちがいないと思われる。

## 2. 市中隠

### 下京茶湯

「下京茶湯とて。此比数寄などいひて。四畳半敷六畳敷をのゝ興行。宗珠さし入、門に大なる松有、杉あり。垣のうち清く。蔦落葉五葉六葉いろこきを見て。

今朝や夜の嵐をひろふはつ紅葉

此発句かならず興行などあらましせし也。」<sup>10</sup>

(『宗長日記』)

この手記は、大永六年(1526年)連歌師柴屋軒宗長が宗珠の「茶屋」、午松庵を訪れた時のものである。四畳半は方丈の間と言われ、先述べた長明ら隠者が求めた山中の草庵の大きさを象徴している。つまり、世捨人や隠遁者の住まいであり、脱俗の空間である。しかし、村田珠光は山里ではなく市中に山居を設けた。これは思想的に慶滋胤胤の「池亭」を受け継いだものであろう。

珠光は茶道の祖村田珠光の跡目を継いだ者である。彼は当時青蓮院門跡尊鎮法親王のもとへ頻繁に出入りしたという事実から、上層社会で茶匠としての活動の範囲や影響力がうかがえる。享禄五年(1532年)五月六日には、鷲尾隆康が、「宗珠茶屋御見物」に訪れ、「山居之躰尤有感、誠可謂市中隠」と感嘆させ、宗珠が「当時数寄之張本」であると日記に書いている。宗珠の六畳や四畳半の外観はいままでの史料ではわからなかったが、「山居之躰」「市中隠」そして先の「門に大なる松有、杉あり」という記載からみれば、だいたい草庵風であったと考えられる。

さて、大永五年(1525)、ちょうど宗珠の「茶屋」が話題になっていた頃のことである。若い時の武野紹鴎は、古典の勉強のため堺より上洛し、三条西実隆に師事した。当時彼が住んでいたのは下京四条町上ルの地であり、この近くはちょうど四条の北にいる宗珠の「茶屋」であった。珠光流の茶湯に影響されたことは

いうまでもないが、紹鴎にはもう一人の影響が看過できなかつた。つまり彼の文芸の師である三条西実隆であった。

『実隆公記』<sup>11</sup>によれば、三条西実隆は文亀二年(1502)六月、連歌師玄清の斡旋で六畳敷の小屋を買い取り、武者小路の屋敷に移築した。移築した時、実隆はわざと六畳敷であったこの小屋を四畳半に改めた。壁は白壁にし、押板や棚では唐紙師を呼んで張らせた。庭には石を立て小樹を植え、板垣などで囲った。実隆はこの書院で古典の研究をし、公家・連歌師・武士などを集めて古典の講釈を行い、和歌・連歌の会を催していた。紹鴎が『詠歌大概』の講義を受けたのもこの小座敷であったと推測できる。

こうして、珠光の「わび茶」は、「下京茶湯」を紹介して紹鴎に継承され、堺に根を張り、さらに利休によって大成されたと考えられる。のちに「草の小座敷、露地の一風」に「茶の真味」(『南方録』)を見出す「わび茶」の思想は、ここに「下京茶湯」の「山居の躰」「市中の隠」から発したのであろう。

### 市中の山居

興味深いのは、「わび茶」が堺への流伝に伴って、山里の草庵という「下京茶湯」の理想も堺の町屋に根を張り、今日の茶屋の原型がかたちづくられていったということである。この様子は、意外にある外国人の鋭い視線によって記録された。ポルトガル人宣教師であるロドリゲスは著書『日本教会史』に「現在流行している数寄と呼ばれる茶の湯の新しい様式について、また一般にその起源と目的」と題する一節を設けて、詳しくこの論述している。

彼によって、「茶の湯 chanoyu に精通した堺 Sacahy のある人たちは、幾本かの小さな樹木をわざわざ植えて、それに囲まれた、前よりも小さい別の形で茶 cha の家を造った。そこでは、狭い地所の許す限り、田園にある一軒屋の様式をあらわすか、人里離れてすむ隠遁者の草庵を真似るかして、自然の事象やその第一義を鑑賞することに専念していた」<sup>12</sup>。「人里離れてすむ隠遁者の草庵を真似る」という指摘は「わび茶」の源流を言い当てる。そして「この都市にあるこれら狭い小家では、たがいに茶 cha に招待しあい、そうすることによって、この都市がその周辺に欠いていた爽やかな隠退の場所の補いをしていた。むしろある点では、彼らはこの様式が純粋な隠退よりもまさると考えていた」<sup>13</sup>。今回さらに「市中の山居」の本質を見抜く。堺の町衆にとって、純粋に隠退することより、都市の中に山里の趣のある隠遁地を見出すことのほうは、価値があるであろう。

『日葡辞書』は「市中の山居」を「広場や市場の中に居て、隠者であること。すなわち、人中にまじっていながら僧侶や隠遁者であることをやめないこと」と解く。この解釈は人中に住む隠者を「大隠」と、人中を離れて住む隠者を「小隠」を連想させる。例えば白楽天の詩に「大隠住朝市、小隠入丘樊」<sup>14</sup>（大隠は朝市に住み、小隠は丘樊に入る）といい、王康琚の詩に「小隠隱陵藪、大隠隱朝市」（小隠は陵藪に隠れ、大隠は朝市に隠る）という。「市中の山居」を標榜する数寄茶湯の茶人たちは、このような「大隠」たることをめざしていたのであろう。実にこの「市中の山居」という観念は、古代隠逸思想の流れの一つとして貴族の社会に継承されてきたことはすでに指摘した。

### むすび

以上二つの角度から、草庵茶室の成立と隠逸思想の関わりを検討してきた。「草庵」というイメージは、隠逸思想と深い関係の文芸趣味によって受け継がれ、次第に表象され、一種の美的感覚として定着されるようになった。茶道形成期になると、古代隠逸思想の流れの一つとして継承された「市中隠」の概念はしだいに新しい土壤に芽生え、成長しつつあった。遁世者たちが山里に隠棲した草庵を賑やかな市中に移転させるという発想は、「市中隠」という思想と深い関係があるといっても過言ではない。

### 参考文献

- 小島憲之校注 『懐風藻；文華秀麗集；本朝文粹』 岩波書店, 1964. 6
- 藤原明衡編 大曾根章介・金原理・後藤昭雄校注 『本朝文粹』 岩波書店, 1992. 5
- 小野岑守 [ほか] 編 『懐風藻・凌雲集』 日本古典全集刊行會, 1927.11
- 松枝茂夫、和田武司訳注 『陶淵明全集』 岩波書店, 1990
- 本間洋一注釈 『本朝無題詩全注釈』 新典社, 1992. 3-1994. 5
- 宗長著 島津忠夫校注 『宗長日記』 岩波書店, 1975. 4
- 神田秀夫・永積安明 安良岡康作 校注・訳 『方丈記・徒然草・正法眼蔵随聞記録・歎異抄』 小学館 1998. 3
- ジョアン・ロドリゲス著 江馬務 [ほか訳注] 『日本教会史』 岩波書店, 1967.10-1970. 3
- 吉川幸次郎・三好達治著 『新唐詩選』 岩波書店, 1952.

- 8-1954. 5
- 千宗室監修 『茶道古典全集』 全12巻淡交社 1956~62
- 倉沢行洋著 『東洋と西洋：世界観・茶道観・藝術観』 東方出版 1992.12
- 中村利則編 『茶室・露地』 淡交社, 2000.4
- 中村利則著 『町家の茶室』 淡交社, 1981.7
- 桜井好朗著 『空より参らむ：中世論のために』 人文書院, 1983. 6
- 木藤才藏著 『中世文学試論』 明治書院, 1984. 3
- 加藤周一 『加藤周一著作集——日本美術の心とかたち』 平凡社
- 古川哲史, 石田一良編集 『日本思想史講座』 吉川弘文館 1986

### 注

- 『茶道古典全集』第三巻 淡交社 昭和三十五年 五一頁。
- 『新修茶道全集』巻八 春秋社 昭和三十一年 十七頁。
- 慶滋保胤よししげのやすたね作の文。982年（天元5）成る。当時の京都の左京・右京の状勢と、作者が荒廢した地に池亭をかまえ閑居した有様を漢文で記す。「方丈記」に与えた影響は著しい。「本朝文粹」所収。
- 『懐風藻；文華秀麗集；本朝文粹』 岩波書店 1964. 6 三五〇頁
- 日本最初の勅撰漢詩集。正称「凌雲新集」。1巻。嵯峨天皇の勅によって小野岑守みねもりら撰。814年（弘仁5）成立か。作者24人、91編（現存本）を収める。唐詩の影響下、詩文隆盛期を反映。
- 『文選』巻二十二「反招隠」詩。
- 『懐風藻；文華秀麗集；本朝文粹』 岩波書店 1964. 6 四二四頁
- 『方丈記・徒然草・正法眼蔵随聞記録・歎異抄』 小学館 1998. 3 二八—二九頁
- 『方丈記・徒然草・正法眼蔵随聞記録・歎異抄』 小学館 1998. 3 二九—三〇頁
- 『宗長日記』 岩波書店, 1975. 4 九二頁
- 三条西実隆の日記。1474年（文明6）から1536年（天文5）まで63年間に及び、応仁の乱後の政治・社会・文化の貴重な史料。漢文。158巻の自筆本が現存。
- 『日本教会史』 岩波書店, 1967.10-1970. 3 六〇六—六〇七頁
- 『日本教会史』 岩波書店, 1967.10-1970. 3 六〇七—六〇八頁
- 『白香山詩後集』巻二「中隠」詩。

ご そう／北京外国語大学 北京日本学研究中心